

場面の効果

1966年10月15日 初版発行

定価 520円

著 者 井 伏 鱒 二

発行者 大 和 岩 雄

発行所 ^{だい} ^わ
大 和 書 房

東京都文京区関口町1

振替東京 6 4 2 2 7

電 話 (203) 4511-4

製版・印刷・弘済印刷 製本・秋田製本

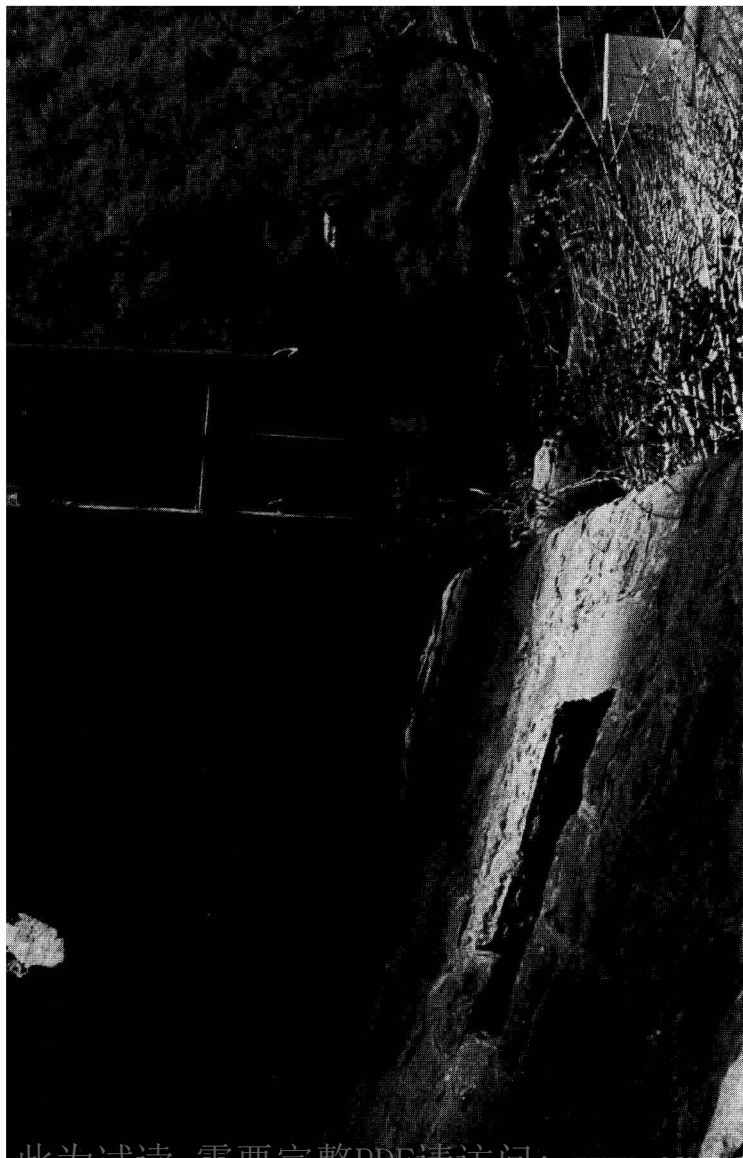
落丁本・乱丁本はお取替えます

《検印略》©1966

場面の効果

井伏鱒二

大和書房



下部川 源泉館の坂下にて

石井彰氏撮

目次

目次	
田園記	11
書畫骨董の災難	19
夏の狐	23
肩車	26
貧乏性	31
おふくろ	41
*	
場面の效果	53
悪戯	61
上京直後	66
フジンの瀧	69

猫	机上風景	日曜畫家	め組の半鐘	祝賀會の夜	源太が手紙	早稻田界限	つらら	アスナロの木	引札	鳥の巢	パイア	私の鳥籠
---	------	------	-------	-------	-------	-------	-----	--------	----	-----	-----	------

152	147	139	131	128	123	114	107	102	97	87	77	72
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----

目 次

御高評	に	失念事	志賀直哉と尾道	八束・斐の川	湯河原沖	グダリ沼	鹽の山・差出の磯	三浦三崎の老釣師	庄内竿	*	點滴
164	171	177	183	191	197	203	224	237	249		267

解	井		琴	南
	伏		の	豆
	鱒	*	記	莊
説	二			の
	の			將
	途			棋
				盤

島	河		
村	上		
	徹		
利	太		
正	郎		
303	290	279	274

1

田園記

いま私は田舎の家に歸っている。庭木の枝をおろしたり、土堀にからまっている蔦をむしりとったり、井戸の水を飲んだりして、とにかく私としては平和な生活を送っている。

ここではお盆が九月だということで、昨日は藪の青竹を切つて墓地の花たてをつくつた。一時間もおかかつて鋸の目をたて、それから夕方ちかくまで費して花たてを全部そろえることができた。今日は手のひらが痛むので、倉の二階にあがつて親父の本箱を見つけ、いったい親父はどんな書物を讀んでいたのだろうかと物色した。父は青年時代に、いまの言葉でいえばそのころの文學青年であつたというのだが、この田舎で愛兒の養育に没頭し、愛兒の一人である私がまだ六つのときに父は死んだのである。遺言書には漢文で、子供たちには決して文學をさしてはいけない、正業に就かすようにと書いている。私は中學生のときそれを祖父から見せられた。

私は父の本箱にゲーテやシェクスピアの作品など藏つてあればいいと思ひながら、鍵のか

かっている本箱の蓋をあけた。そこには昆蟲の標本やパーレー萬國史やカラフトのない日本地圖や、とりわけなさけなく思われる病中日記などが藏つてあつた。日記には「――月日。文夫をつれて朝八時に發つ。晝ころ、軻之津に着く。發熱……」などという箇所があつた。文夫というのは私の實兄のことで、私たち兄弟でなくては讀んでもすべて感じの起りそうもない日記文であつた。

もう一つの細長い本箱に藏つてある中身も、文學的には興味の乏しいものばかりであつた。この本箱には主に手紙の束がはいつていた。私は尾崎紅葉の手紙か坪内逍遙の筆蹟でもないかと綿密にしらべたが、私にはちつともゆかりのない妹尾吟一郎とか野口寧齋とか末松某とかいう人の手紙があつた。筆蹟だけは達者な手紙である。文學的に見て、父はそのころでも時代に後れていた青年であつたろうと思わなければならなかつた。妹尾吟一郎という人の手紙が一ばん澤山あつた。それによると、父は妹尾吟一郎と親友の誓を結ぶために、吟一郎に和歌や漢詩をデジケイトした形跡がある。また末松某なる人に、時候見舞を述べるついでをもつて書留小包で寒桃を贈っている。私は妹尾吟一郎や末松某が、はたしてどんな人であつたか知らないのである。或は明治調の俗物であつたかも知からない。もしそうだったらと案じられ、私は倉の二階で、ひとり肩身のせまい思いをするのであつた。

私は倉の窓から息ぬき（新鮮な空氣を吸うこと）をした。窓から見える往還を、珍しいことに氷みずの行商人が「氷、氷、氷、寒氷」と呼びながら歩いてゐた。私が子供のとき、夏休みには、一週間に一度ぐらいの割で、氷の行商人が村にやって來たものであった。私の母はときどき私に氷みずを買ってくれたが、たいてい私は川へ遊びに行つて夕方まで歸らないことが多かった。せつかく母が大事に鼠入らずに入れておく氷みずは、夕方までにはコップの底で砂糖みずになつていた。

私は父の本箱から、和綴のノートブックを取出して、かねて私の愛誦してゐたことのある漢詩が翻譯してあるのを發見した。それは誰が翻譯したのか譯者の名前は書いてなかつたが、こまかい字で譯文だけが記されてゐた。きっと父が参考書から拔書きしたものだらう。漢籍に心得のある人には珍しくない翻譯かもしれないが、ここにすこしばかりそれを拔萃して、その原文も書き寫す。但、譯文には私が少し手を入れる。

題袁氏別業

賀知章

主人不相識

主人ハダレト名ハ知ラネドモ

偶坐爲林泉
莫謾愁沽酒
囊中自有錢

庭ガミタサニチヨトコシカケタ
サケヲ買ウトテオ世話ハムヨウ
ワシガサイフニゼニガアル

照鏡見白髮

張九齡

宿昔青雲志
蹉跎白髮年
誰知明鏡裏
形影自相憐

シュッセシヨウト思ウテイタニ
ドウコウスル間ニトシバカリヨル
ヒトリカガミニウチヨリミレバ
皺ノヨッタヲアワレムバカリ

送朱大入秦

孟浩然

遊人五陵去
寶劍直千金
分手脫相贈
平生一片心

コンドキサマハオ江戸ヘユキヤル
オレガカタナハ千兩ドウグ
コレヲシンゼルセンベツニ
ツネノ氣性ハコレジャトオモエ

春曉

孟浩然

春眠不覺曉
處處聞啼鳥
夜來風雨聲
花落知多少

ハルノネザメノウツツデ聞ケバ
トリノナクネデ目ガサメマシタ
ヨルノアラシニ雨マジリ
散ッタ木ノ花イカホドバカリ

洛陽道

儲光羲

大道直如髮
春日佳氣多
五陵貴公子
雙雙鳴玉珂

ミチハマツスグ先ズ髮スジダ
ドウモ云ワレヌコノ春ゲシキ
ヤシキヤシキノ若トノ衆ガ
サノウクツワノオトリンリント

長安道

儲光羲

鳴鞭過酒肆

馬ニムチウチサカヤヲスギテ